
脅迫メール

結城陸空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脅迫メール

【Nコード】

N1588B

【作者名】

結城陸空

【あらすじ】

ある日、あたしの元に脅迫メールが来た。その内容はとても不思議なものだった。

(前書き)

この作品、女の方から見て多少不快さを感じるかもしれませんが。あらかじめご了承ください。

『お前の大事な者を預かった。返して欲しいなら私の言うことにしたがってもらおう』

こんな、メールが来たのはあたしが買い物に行った帰りのことだった。夕ご飯の買い物に来ていたのだ。

正直、最初このメールを見たときはただの悪戯だと思った。誰だっと思うだろう。しかし、あたしはこのメールの内容が嘘ではないことをすぐに知ることになる。

あたしには、家族がない。あたしの両親は早くに亡くなったし、夫は三ヶ月前に他界。夫の両親とは仲良くなかったので一人身だ。

でもそんなあたしにもようやく家族が出来る。あたしのお腹には生後三ヶ月の赤ちゃんがいる。すこしお腹が膨れているのがとてもうれしい。あたしのお腹の中にいるのは、あたしの大事な大事な赤ちゃん。

そんな晴れやかな気分で購入物に向かった帰りだった。このメールが突然携帯に送られてきたのは。

あたしは悪戯だと思ったので、そのメールをすぐに消して、携帯を閉じようとした。するとまた携帯がメールの受信をはじめた。

——メールは、またさっきと同じ人からだった。ただ少し内容に変化があった。

『お前の大事な者を預かった。返して欲しいなら私の言うことに従つてもらおう。やることは簡単だ。そのお腹の赤ん坊を降ろせ。そうすればお前の大事な者の命は助けてやる』

……なぜ、あたしのお腹にいる赤ちゃんのことを。このことは今はまだ誰にも話していない。先日分かったばかりで友達にも話していないのだ。それに——赤ちゃんを降ろせて。そうすれば大事な者を助けるなんて。

なにを言っているのだ。あたしには家族はいない。今一番大事な
のはお腹の中にいる赤ちゃんだ。ほかの誰にも代えられない。もし
赤ちゃんか他の誰かを殺せと言われたらあたしは間違ひなく赤ちゃん
を守るために他の誰かを殺すだろう。

メールを見ながらそんなことを考えているとまたメールが来た。

『赤ん坊を降ろせ。赤ん坊を降ろせ。赤ん坊を降ろせ。赤ん坊を降ろせ。』

赤ん坊を降ろせ。赤ん坊を降ろせ。そうすればお前の大事な者の命は助けてやる』

このメールを見た瞬間、あたしの顔は青ざめ、背筋に冷たいものが通った。なんなの……このメールは。

怯えて鳥肌が立っている自分に気が付かずメールから目を離せないでいると突然携帯が鳴った。携帯の音に身体が一瞬、硬直したが、すぐに戻り、電話をとった。

『はい、もしもし?』

『あゝ、山村さん？ 今日とは定期健診の日ですよ。病院で待ってま
すんでちゃんと来て下さいね』

病院の院長からだった。この人には昔から世話になっている。産
婦人科と整形外科を構える病院の院長だ。こんな電話をかけてくる
のもあたしがこの間の定期健診に行かなかったからだ。ただ忙しく
ていく暇がなかったただけなんだけど。

あたしはその電話にすこし肩を撫で下ろし、病院に行くために買
い物袋を家に持って帰った。そして荷物を降ろし、車に乗り込んで
病院へ向かう。

病院に着いたあたしは、少し順番待ちをした後、院長のいる診察
室へと呼ばれた。

「やあ、どうだい？ お腹の状況は？」

「あ、順調だと思います」

「うん、顔を見ると幸せそうだよ」

「え？ あ、ありがとうございます」

少し頬を赤く染めテレ笑いをしながら答える。そんな恥ずかしい
ことを急に言われるとは思わなかった。

「それじゃあ、そこに横になってくれるかな？ 音波検査してみよ
う」

そう言われあたしはベッドに横になった。

「ホラ！ 見てみて三ヶ月の君の赤ちゃんだ」

先生に言われて、画面を見ると確かなにかが映っていた。これが赤ちゃんなのか。三ヶ月ということでもまだほとんど分からなかったが実感はあった。あたしのお腹にいる赤ちゃん。

検査が終わり、あたしは帰宅した。そしていつものようにご飯を食べ、お風呂に入り、布団に入って静かに寝静まった。一人暮らしは、気楽でいい。確かに寂しさはあるけど、あたしには赤ちゃんがいる。

翌朝、いつもと変わらない朝だ。しかもとても天気がいい。こんな日は散歩にでも出かけよう。赤ちゃんもきつと喜ぶ。そう思いあたしは自分のお腹に手を乗せた。

「……え？」

あたしのお腹は、へこんでいた。なにもふくれていない。なにもないただのお腹。

「え！？ え！？ どういうこと！？ え！？ そんな！？ あたしの……！？」

あたしは激しく動揺した。いや、動揺なんてレベルじゃない。お腹の中にいたはずの赤ちゃんが跡形もなく消えているのだ。あたしは、飛び起きて化粧もなにもせず、ご飯も食べずに着替えただけ急いでして、すぐに病院に向かった。

病院についたあたしは、カウンターにいる看護師の人に先生を呼

んでもらった。たまたま手が開いていたのか先生はすぐにやっ
た。

「せ！ 先生！！ あた……あたしの、あたしの赤ちゃんが！！」

先生は驚いた表情をしている。

「落ち着いてください。柳瀬さん。大丈夫ですか？」

「あたしの……赤ちゃんがいないんです！！ どうして！ なんで
！！ あたしの……」

「ちょっと柳瀬さん……。あまり激しく動かないでください」

先生は妙に落ち着いている。周りのみんなもあたしの顔を見てい
る。混乱しているあたしを見ている。

「でも！ あたしの……赤ちゃんが……」

「だから、落ち着いてください。あなたは赤ちゃんを身ごもって
いませんよ」

先生のその言葉にあたしの声は止まった。

「え？ な、なに言ってるんですか？ だって昨日も……」

「昨日は、あなたはその怪我した足の治療にきたんじゃないですか
？」

先生のその言葉を聞いてあたしは自分の足を見る。すると膝の部

分に包帯が巻いてあった。身に覚えのない傷に包帯。

「嘘……だって昨日も定期健診にきて音波検査しましたよ？」

「昨日は、あなたは確かに定期健診でした。足のね。包帯やガーゼを替えてX線写真を撮ったんです。覚えてませんか？」

「嘘……嘘よ！　だって昨日は確かにあたしのお腹の中には……ちやんと見たのよ。先生だって産婦人科の先生でしょ！？」

先生は、再び驚きの表情を浮かべている。周りの人も驚きの表情を浮かべている。

「柳瀬さん。ここは、整形外科だけで、産婦人科はありません」

先生は、冷静に答える。周りのみんなは近くの人とヒソヒソ話でした。

「嘘、嘘、嘘……！」

あたしは、先生達の横を走って通りぬけ昨日音波検査を受けた部屋へと走る。

「あ、ちよつと柳瀬さん……！」

みんながあたしを騙している。あたしは、確かに赤ちゃんの検査を受けていた。昨日までお腹も膨れていたし、感覚もあった。それが突然なくなるなんて馬鹿なことがあるはずがない。

昨日検査を受けた場所へとやってきた。あたしは走ってきたいき

おいでドアを開ける。

そこにあったのは、暗い物置倉庫だった。目でみても分かるくらい何年も使われていない。掃除もされていないような部屋。立っていられなくなったあたしはその場に座り込んだ。眼からは大粒の涙が流れてくる。信じたくなかった信じることができなかった。

しばらくして先生達がやってきた。

「柳瀬さん、大丈夫ですか？」

あたしは看護師の人に助けられ、立ち上がる。

「柳瀬さん一度精神科のほうで見てもらったほうがいい、いい病院を紹介します」

あたしは、狂っているの？ 確かに記憶があるのに。お腹に赤ちやんがいた記憶が。でもいまこの現実でお腹にその感触はない。あ
るのは身に覚えのない脚の怪我だけ。

「……？ え？ ……先生、あたしこの足の傷どこで？」

「あなたから聞いた話だと、階段で転んで打ったと聞きましたよ。
それで足の膝の骨に軽い亀裂が……」

「階段って、家の階段ですか？」

「いえ、神社って言ってたじゃないですか？ 確か、大北神社だったかな？」

今見ても気持ちが悪い。でもそれより確かにこのメールは存在している。ということは間違いなくあたしは赤ちゃんをこのお腹に宿らせていたということ。でも朝起きたらそれはなくなつて。病院も……。意味が分からない。

と、その時メールの受信画面に突然切り替わった。

「え？」

驚いたあたしは画面に食い入るように見る。受信されたメールはこのメールを送ってきた人からだった。

『降ろせ』

その一文だけだった。どういうこと？ あたしは余計に混乱した。降ろせて、赤ちゃんを降ろすということ？

もうあたしの中にはいないのに。それなのにまたこんなメールが。みんなあたしの気が狂つてると思つている。でも確かにメールには赤ちゃんを降ろせと書いてある。このメールがあるということは確かに赤ちゃんは存在していたということ。ということは病院はグルになってあたしを騙している？ でも確かに昨日寝るまでは赤ちゃんがいたのに、急に消えるなんてそんなこと。

その時、電話がかかってきた。病院の先生からだった。

『あ、柳瀬さん。精神病院の先生に言っておきましたので言つてく
ださい。場所は――』

「先生、嘘ですよ？ あたし、やっぱり赤ちゃんいましたよね？」

『……、柳瀬さん。精神病院で一度見てもらってから……』

「その必要はないですよ。赤ちゃんがいた証拠があるんです。間違はなくあたしのお腹には赤ちゃんがいました。そして病院でも見てもらいました」

『……』

「先生が、盗ったんですか？」

『え？』

「返して……、返してください！！　あたしの赤ちゃん！！」

『……がッ……ババッ……プッ……おろ……ろせ……』

「え？」

あたしは、電話機の方こうから突然聞こえてきた謎の音に耳を傾けた。

『……』

なにも聞こえない。気のせいだったのだろうか。

「せ、先生？」

『……赤ん坊を降ろせ』

あたしは、その声を聞いた途端携帯を落としてしまった。それも

そのはずだ。今の言葉は、昨日来ていたメールの内容のそのままだ。

あまりに驚いたため、あたしの身体は動かない。落とした衝撃で電話は切れたらしい。また電話がかかってきた。でも身体はなぜか動かない。しばらくコールが鳴った後、留守電に切り替わった。

『ピーー。……降ろせ。赤ん坊を降ろせ。降ろせ。赤ん坊を降ろせ、降ろせ、降ろせ、降ろせ、降ろせ』

その声は、留守電が録音する時間ずっと流れていた。意味がわからない。あたしのお腹には赤ちゃんがいない。突然消えたのだ。赤ちゃんを降ろせと言われてもないんだ。降ろせない。どうすればいいの？

「あたしにどうしろって言うの？」

あたしは、ポツリと呟いた。

赤ちゃんを降ろすことであたしの大事な者の命が守られる。でもあたしには赤ちゃんが一番大事なのに。返して誰でもいいから。あたしの赤ちゃん。もうあたしは動く気力さえなくなっていた。

あたしは、赤ちゃんを身ごもっていた。でもそれは、あたしの中でのことだ。あたしは、お腹の中に赤ちゃんがいると勘違いしていたのだ。”想像妊娠”というものだと思う。

夫を亡くしたことで精神的に病んでいた。それが原因の想像妊娠
だと思っ

妊娠したと勘違いしたあたしの心と身体は、それに備えはじめ母
性本能が出てきた。それに伴い、神社へと安産祈願、その帰りに階
段から落ちたあたしは、病院への通院、定期治療。

その間も、あたしの中の勘違いは大きくなっていく。そして三ヶ
月。あたしの想像妊娠は終わった。

あのメールや電話は、まともなあたしが残したメッセージだった
のかも知れない。

”想像の中の赤ちゃんを降ろさないと、自分の命が危険にさらさ
れる”という意味の自分に向けた生きることへの最後のメッセージ。

それに気がついていれば、あたしは……餓死という無残な死に様
で発見されることなどなかったのに……。

了

（後書き）

読んで頂きありがとうございます。いかがでしたでしょうか？ 感想などいただけると幸いです。また気分を害されましたかたには申し訳ないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1588b/>

脅迫メール

2010年10月11日13時35分発行